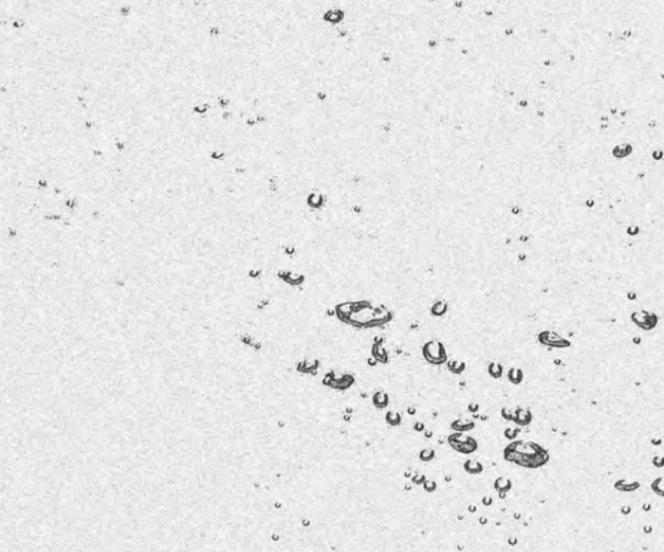


メビウス  
ゲイト  
桜  
田  
門

龍道真一

大隅書店







目次

第一章	異変	7
第二章	江戸屋敷	21
第三章	彦根の記憶	35
第四章	疾風怒涛	55
第五章	決断	73
第六章	狂愚の師	91
第七章	赤い牙	103
第八章	幽霊研究所	127
第九章	楯	149
第十章	正義と思想	167
第十一章	炸裂	183
第十二章	龍の舞い	201
第十三章	桜田門	221
第十四章	輝く星々	229
あとがき		234

S a m p l e

第一章

---

異  
變



先生とぼくは、皇居前広場から、東の桜田門の方へ、フラフラと歩いてきた。

二〇二〇年、オリンピックイヤーの今年、四月のよく晴れた土曜日の午後、皇居前広場で、東京オリンピック開会式イベントのリハーサルがあった。

世界中の人々に向けて日本の歴史を紹介するために、縄文時代に始まり、奈良、平安、鎌倉、室町、戦国、江戸時代へと至り、そして現代へと繋がる、歴史絵巻のパフォーマンスだ。

そのリハーサルに、ぼくはゼミの教授である大石先生とともに、エキストラとして参加した。終了後、日本各地の銘酒や地ビールなどの差し入れがあった。

ぼくは、ビールを選んで喉を潤した。一方、先生は、主催者のふるまいと知って、「身体に穴が空いているんじゃない？」と思うくらいにお酒を呑みまくって、上機嫌になっていた。

ふと周囲を見渡すと、すでに日は沈み、あたりは薄暗くなり始めていた。

参加者は一人もいなくなり、片付けが終わって主催者も帰り始めたので、先生はやっと帰る気になったみたいだ——。

桜田門は、内側の渡櫓門と外側の高麗門との二重門からなっている。豪壮な二つの城門に囲

まれた枳形の広場を抜けて、ぼくらは警視庁前の地下鉄桜田門駅へと、皇居の内堀を渡る道を歩いた。

そのとき、内堀通り沿いの街灯がいつせいに点灯し、視界の左右に広がる凱旋濠と桜田濠の水面が宝石のように輝いて見えた。

「うわあ、宝石の海を渡るようだ！ この道は夢の世界へと続くみたいですね!？」

ぼくがそう言うと、酔った先生が突然立ち止まって、両手を夕空に掲げ、甲高い声を上げた。

「嗚呼、運命は、最もふさわしい場所へ、われらの魂を誘う……。われらの魂は、神々の住まうあの星空の彼方へ、まさに飛翔せんとする……」

先生は目を閉じて胸の前で掌を組み、オペラ歌手のように情念を込めて叫んだ。

「おお、シェイクスピアよ！ あなたの言葉は、わたしの心の闇で、宝石のように煌く！ 真実の言葉こそが、闇に輝きを放つ！ あなたは、なんと多くの神々の言葉を知っているのらうか！」

名優になりきっている先生にプツと吹き出しながら、ぼくは、「らうか、でなくって、だろ、うかでしょ。呑みすぎですよ、先生は」と、つい突っ込みを入れてしまった。

この変な先生は、新宿にある甲部大学の宇宙惑星学科教授で、名前は大石九蔵。容貌は、アインシュタインに似ていなくもない。最近、チョビ髭まで生やし始めて、ますますそのつもり

らしい。でっぷりしたおなかにまんまる顔。よく食べ、よく呑む、超メタボ先生さ。

ぼくの名前は小林遼<sup>りょう</sup>。甲部大学に通う大学生で、大石先生の研究室で宇宙物理学を専攻している。まだ学部<sup>せふぶ</sup>の四年生だけど、先生とはなぜか気が合って、いつのまにかお守り<sup>ももり</sup>役みたいになっっている。

クラブは野球部で、ポジションはピッチャー。ストレートは、時速百五十キロを超えたこともある。コントロールにも、まあまあ自信はあるよ。応援団の女子から「ダルビッシュュ！」って声をかけられたりもするけど、似てるとしたら、背が高く細身なところくらいかな？

このイベントで、ぼくは若侍の役で、主催者が準備した羽織袴<sup>はおりはかま</sup>に草履<sup>ぞうり</sup>の姿でチョンマゲ付き鬘<sup>かまつら</sup>をかぶっていた。チョンマゲ付き鬘は、プラスチック製の作り物だけど、なかなか精巧に作られていて、まるで本物みたいだ。

一方、大石先生は、テレビの「水戸黄門」に出て来る徳川光圀<sup>みつくに</sup>の役で、「ご隠居様」の扮装だった。台本では、ご隠居役は、筆と短冊<sup>たんざく</sup>を手持って短歌などを書きながら歩くだけのはずだけど、先生は、太った身体でクルクルと回ったり、筆を鼻の上に立てて歩いたり、アドリブをやりすぎて、主催者から何度も注意されていた。でも、見物客からは笑いが起こって、結構人気が出てしまったようだった。

そんなこんながあっただけど、なんとかりハーサルも終わり、ようやく帰るところだった。

そのとき、なんとなく様子が変わだと思った。

酔っているせいかもしれないけど、やっぱりなにか変だ。

周囲を見ると、足元や街灯がぼやけて見える。ぼくは目をこすってもう一度周囲をよく見た。すると、足元が見えないくらいに霧が立ち込め始めている。

四月の東京にしては珍しい、深い霧だ。地下鉄桜田門駅の入り口がさっきまで見えていたのに、今は、ほんの一步先もわからないくらいになっっている。

ぼくは酔いが回りすぎたのかと思って、思い切り頬<sup>ほほ</sup>をつねった。痛みを感じながら周囲を見ただけど、やはり状況は同じだった。

「小林君、どうしよう!! これじゃ、帰れないよお〜」

先生はそう言って、泣きそうな表情をした。

「先生がいつまでも呑み続けるからですよ。早く帰ろうって、何度も言ったのにい〜。先生がなかなか帰らないから、こんなことになるんですよ!」

「まあまあ、そう怒らんでくれよお〜」

ぼくが怒ったのは、隣の家のマリちゃんが、来年中学受験で、算数を教えて欲しいと言っていたからだった。ぼくが「夕方には必ず帰るからね」と言うと、マリちゃんは「わかった。じゃ

あ、お兄ちゃんが帰るまで待つてるから！」と、明るい声で応えてくれた。そのときの彼女の大きな黒い瞳と笑顔が鮮明に浮かんで来て、ぼくの心をギョッと締めつけた。

「小林君、一体どうしたんじゃ？　なんだかトロンとした目じゃな」

ぼくはわれに返って、「酔いが回って来ただけですよ！」と、思わず苛立つた声を上げた。

「おお、少し霧が晴れたな。ほれ、地下鉄桜田門の駅が見える。もうそこじゃよ」

と、先生は通りの先を指差した。

霧が少し晴れて、四、五メートル先に、駅の照明灯が見えた。

ところが、突然、再び周囲に白い霧がさらに深く立ち込め始めた。

そのとき、先生が腕時計を見て大声を上げた。

「おおう、小林君！　時計の針が勝手に回っておる！　グルグル回りどおしじゃ。しかも反対に回っておるよ！」

ぼくも腕時計を見た。デジタル表示の文字がデタラメに動いている。

「うわあ、先生！　ぼくの時計も変ですよ！」

周囲はますます霧が深く立ち込め、暗くなって来た。

正面にかすかに見える警視庁の建物が、グニャグニャと歪んでいる。

「ニャオーン……」

どこからか猫の声がして、ぼくらはあたりを見回した。

「アッ、あそこだ！」

ぼくは地下鉄桜田門駅の入り口のところに猫が見えたように思い、そっちの方向を指差した。

猫好きの先生は、すぐに一匹の虎猫を見つけた。茶色の虎縞の猫で、瑠璃色の瞳を輝かせて、

先生の方をじっと見ている。

先生もまた負けないくらいに大きく目を見開いて、「可愛い小猫ちゃんではないですか！」と

陽気な甲高い声を上げた。

虎猫は先生の声に驚いたのか、身を翻し、濃霧が漂う暗闇の中へと走り去った。

「追うべきか、追わざるべきか——これはまさに、シェイクスピアのハムレットの心境じゃな。

彼のセリフは真実を含んでおるよ」

先生はそう言いながら、猫の方へと駆け出した。

「先生、待ってください！　酔って走ったら、あぶないですよ！」

ぼくは先生の後を追った。

そのとき、先生の姿が、白い霧のなかに掻き消され、次の瞬間、ぼくは飛行機で上空へと加速するとき感じるような重力を全身に感じた。

「うあああ……!!」

思わず大きな叫び声を上げながら、ぼくは目の前が真っ暗になるのを感じた。

2

潮風の匂いを感じながら目を開くと、真っ青な空が見えた。よく晴れている――。

自分が小高い緑の丘の中腹に寝転がっているのがわかった。

記憶のなかでは、全身にかなり強い重力を感じた後、一気に開放された感じがあった。その後、二段ベッドの上段から落ちたときのような、強い衝撃を受けたように思った。とりあえず立ち上がろうとしたが、ふらついてよろけてしまった。

羽織袴に草履穿きの若侍の姿で、チョンマゲ鬘はつけたままだ。

「一体ここはどこだ!!」

ぼくはもう一度、周囲を見回した。若葉色の丘の向こうに、青い海が広がって見えた。

海岸線は見事な曲線を描いており、曲線の先は空と海の向こうに消えていた。

下の方から、なにか獣けもののような唸りうなり声が聞こえた。

驚いて近づいてみると、なんと、ご隠居姿の大石先生である!

ぼくは斜面を駆け降り、側そばまで行って跪ひざまずき、先生を抱き起こした。

「大丈夫ですか!」

大きな声を張り上げつつ、先生の体を揺り動かした。

「ムニヤ、ムニヤ、まだまだ食べられるよお〜」

この状況で、食べ物の夢を見ているなんて、まったく!

「あゝあ、よく寝ちゃったよお〜」

大きな伸びをしながら、先生は体を起こし、草の上に胡坐あぐらをかいて座った。

「おやつ、ここは一体どこなんじゃろう!? たしか、わしらは桜田門を出て、地下鉄の桜田門駅に向かっていたはずじゃが。とつぜん可愛い虎猫が出て来て……!」

先生はそう言いながら、きよとんとした目でぼくの方を見た。

「小林君、一体これはどうなってるの!?!」

「実はぼくも、今気がついたところなんですよ。どうなっているんでしょうね。それに、ここはどこなんでしょう!?!」

ぼくらはもう一度、ゆっくりと周囲を見回した。

東京の都心とはかけ離れた景色だ。丘の向こうに海が広がっている。

訳がわからない。

そのとき、上の方になにか気配を感じて、ぼくは丘の頂の方を見上げた。

ぼくらのいる丘から数十メートル離れた別の小高い丘の頂に、五、六名の侍の姿が見えた。白い馬に乗った殿様風の男を先頭に、栗毛の馬に乗った供侍たちが後ろに控えていて、その丘の頂の向こう側から、今、駆け上がって来たようだ。

ここはやっぱり、時代小説風な語り口でないかと、雰囲気が出ないな。例えば、

——殿様風の男は白馬に跨り、海の方を見下ろし始めた。剛毅な顔立ちで、濃い眉尻が吊り上り、目には深い光を湛えているようだ。鼻筋は通り、気品に溢れる相である。恰幅がよく、動きに覇気が感じられる。彼は金糸、銀糸で飾った羽織りを身につけ、鹿の革で作った馬袴を穿いている。かなり身分の高い殿様に見えた。

と言えば、雰囲気が出そうだ。

殿様は、見下ろしている先、すなわち海岸線に目をやった。浜辺には多くの人が群がっていて、沖の方を指差しながら、なにか騒いでいる。ぼくと先生は、彼らが指し示す方向に目をやった。

「あれは、なんですか？」

「おお！」

沖には、巨大な黒い物体が浮かんでいる。天守が数層以上ある黒い城が、海上にそそり立ち、太陽の光を受けて、黒く輝いているように見えた。さらに、城郭の側面に配置された十数個の穴から、砲口のようなものが見える。黒い城の怪しく光る砲口は、海面の光を乱反射しながら、猛獣の牙のように光って見えた。

「船……黒い船じゃ……」

先生は思わず声を漏らした。

その黒い船数隻が、激しく煙を吐きながら、右手から左手へと進んで行く。

「もしかしたら、あれは『黒船』じゃないか？ ほれ、幕末の黒船じゃよ」

「まさか！ それはないでしょう。ぼくらは知らないうちに、時代劇のセットにでも入ったんじゃないですか。幕末だなんてありえないですよ。大砲でも撃ってくれば別ですが……」

ぼくが先生の言葉を否定したそのとき、突然、雷のような大きな音が鳴り響いた。

なんと、黒い船の砲口がいつせいに赤い炎を放ったのだ！

天を裂くような雷鳴が轟き、海岸線にこだました。

続いて、空気を切り裂くようなヒューという音が聞こえた。

そして、船と海岸線の途中に水飛沫が上がった。

そのとき、丘の上の方から、馬が鼻を震わせ嘶く声が聞こえた。

「どうどう！ 矢吹！ どうどう！」

馬を諫める声が、はつきりと聞こえる。

「矢吹！ 止まれ！ 止まれエ！」

侍たちの緊迫した声が続ぎ、最後は叫ぶような声に変わった。

白馬が蹄を鳴らして丘を駆け下りて来る。

よく見ると、白馬の上の殿様の右足が手綱に絡まっており、馬に引きずられている。

殿様は右足を取られつつも、なんとか馬を御しながら、斜面にある灌木や大きな石を、右、左と身体をくねらせて、上手に避けつつ滑り降りて来た。

殿様を乗せていた白馬は、さきほどの砲弾の音で驚いたのか、目を剥き白い泡を吹いて、尋常な状態ではない。

栗毛の馬に乗った侍たちは、見事な手綱さばきで続き、殿様の白馬の前に出ては、懸命に制止しようとした。

しかし、白馬は恐怖に慄きながら、左右に体をかわし、侍たちの制止を振り切り、追隨を

許さなかった。そして、なんとぼくらの方へと駆け下りて来たのだ。

そして今、血走った眼が見えるところで、荒馬が迫って来た！

先生は「あぶない！」と叫ぶと、咄嗟に羽織を脱ぐや否や、ぼくを突き飛ばした。同時に、太った体を軽やかに宙で回転させつつ荒馬の頭上を飛びながら、羽織で馬の顔を覆った。

目の前が真っ暗になった馬は、前脚を踏ん張って、大きな声で嘶いた。後ろから追って来た若い侍が、鞍の上で身を屈めたかと思うと、一気に荒馬に飛び移り、思い切り手綱を引いた。荒馬は後ろ脚で仁王立ちになり、両前脚で何度も宙を蹴った。そして、前脚を下に降ろすと、今度は後ろ脚で斜面の土を蹴り上げた。

荒馬が走るのを止めた瞬間、右足を引きずられていた殿様は、脇差を抜き「えいッ」とばかり声を上げて手綱を断ち切った。

手綱を断ち切った後、殿様は斜面にぐったりとなった。

ぼくは心配になって急いで駆け寄った。

「大丈夫ですか？」

殿様は右足と左腕を痛めたのか、動けないようで、肩からの出血もひどいようだった。

ぼくは、足に絡まった手綱を解いてから、殿様を抱き起こした。

殿様は、ぼくを見て、

「かたじけない……」  
と呻くように言った。

どうしようかと、ぼくは一瞬躊躇ったが、野球部で仲間が脱臼したり骨折したりしたときに  
する処置のことを思い出した。

「じつとしてください」

懐からサラシの手ぬぐいを取り出して、ぼくは殿様の腕を縛った。

殿様は、腕を縛るときは痛そうだったが、止血の処置をすると安心したようだった。

そのとき、先生の叫び声が聞こえた。

次の瞬間、馬の嘶く声がかと思うと、ぼくは宙を飛んでいた――。

S a m p l e

あとがき

井伊直弼公について、十年近くに渡る準備をもとに、二〇〇四年、『化天』という時代小説を書き上げました。これを故井伊文字様にお送りしたところ、ご丁寧なお手紙と、「御縁を大切に」というお言葉を頂戴しました。

しかしながら、当時の私は、多忙を極め、残念ながら、直弼公の事績顕彰活動がほとんど出来ませんでした。このため、長らく事績顕彰を果たしたいと願っておりまして。

幸い、昨年、彦根で講演を行う機会がありまして、その折に、若い人向けで、そのときの講演内容を盛り込んだ小説を出してもらえないかという、強い要望を受けました。

そこで私が考えたのが、若い読者にとってとっつきやすく、理解が得られやすいと思われる、SF的なユーモア小説の具現化でした。

しかしながら、そもそも井伊直弼公について書かれた若い人向けの小説がこれまでなかったということもあり、かなりハードルが高く、苦心して書き上げた次第です。

本書を執筆するにあたりまして、お励ましやご支援をいただいた、故井伊文字様、井伊岳夫様、商工会議所会頭小出秀樹様、千成亭社長上田健一郎様、井尻久嗣様、櫻俱樂部の日下英治様はじめ会員の皆様、彦根城博物館の岡本峰雄様はじめ友の会の皆様には、心から感謝申し上げます。

またデビュー以来、小説創作に多大な援助をしてくれ、今回も他の用事を後回しにして懸命に協力してくれた末次真理子に感謝します。

最後になりましたが、この『メビウスゲイト桜田門』を出版まで進めていただいた、大隅書店の大隅社長に、心より感謝申し上げます。

本書が、若い人はもちろん、多くの方々に読まれ、井伊直弼公生誕二百年を記念して、事績顕彰が少しで進むことを心より祈念しております。

二〇一五年 初夏

龍道真一

## 著者紹介

龍道 真一（りゅうどう・しんいち）

一九五三年生まれ。早稲田大学理工学部中退後、京都大学工学部を経て、一九八〇年、同大学工学研究科修士課程修了。大手電機メーカー勤務のかたわら、企業小説『大衆は神のごとく正しし』（一九九三年）で作家デビューし、『七難八苦、我に与えよ』（一九九四年）、『陽よ、明日に輝け！』（一九九五年）を発表。阪神大震災の際には、自らの体験をもとにした『裂けた空のあなたに』（一九九六年）を刊行し話題を呼ぶ。その後、『白輪——小説・伊能忠敬』（一九九九年）、『化天——小説最後の武士・井伊直弼』（二〇〇四年）といった時代小説を精力的に執筆、現在に至る。

## メビウスゲイト桜田門

二〇一五年一〇月二十九日 第一刷発行

著者 龍道真一  
発行者 大隅直人  
発行所 大隅書店

〒五二〇一〇二四二  
滋賀県大津市本堅田五一六―一二 コマザワビル五〇五号  
電話 〇七七―五七四―七一五二  
振替 〇〇九三〇―九一二七二五六三

Website <http://ohsumishoten.com/>  
E-mail [info@ohsumishoten.com](mailto:info@ohsumishoten.com)  
装幀 北尾 崇 (HON DESIGN)  
装画 スカイエム  
印刷 共同印刷工業  
製本 藤沢製本

Copyright © 2015 by Shinichi Ryudou

Printed in Japan

ISBN 978-4-905328-13-1





---

## Dies ist ein WWF-Dokument und kann nicht ausgedruckt werden!

Das WWF-Format ist ein PDF, das man nicht ausdrucken kann. So einfach können unnötige Ausdrücke von Dokumenten vermieden, die Umwelt entlastet und Bäume gerettet werden. Mit Ihrer Hilfe. Bestimmen Sie selbst, was nicht ausgedruckt werden soll, und speichern Sie es im WWF-Format. [saveaswwf.com](http://saveaswwf.com)

---

## This is a WWF document and cannot be printed!

The WWF format is a PDF that cannot be printed. It's a simple way to avoid unnecessary printing. So here's your chance to save trees and help the environment. Decide for yourself which documents don't need printing – and save them as WWF. [saveaswwf.com](http://saveaswwf.com)

---

## Este documento es un WWF y no se puede imprimir.

Un archivo WWF es un PDF que no se puede imprimir. De esta sencilla manera, se evita la impresión innecesaria de documentos, lo que beneficia al medio ambiente. Salvar árboles está en tus manos. Decide por ti mismo qué documentos no precisan ser impresos y guárdalos en formato WWF. [saveaswwf.com](http://saveaswwf.com)

---

## Ceci est un document WWF qui ne peut pas être imprimé!

Le format WWF est un PDF non imprimable. L'idée est de prévenir très simplement le gâchis de papier afin de préserver l'environnement et de sauver des arbres. Grâce à votre aide. Définissez vous-même ce qui n'a pas besoin d'être imprimé et sauvegardez ces documents au format WWF. [saveaswwf.com](http://saveaswwf.com)

---



SAVE AS WWF, SAVE A TREE